
reunite

季樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

reunite

【Nコード】

N3850A

【作者名】

季樹

【あらすじ】

彼女の前に突然現れた男。どこか謎めいた雰囲気その男の出現は、彼女の中の何かに影響を与え始めていた。

第1話

将来を誓い合った二人がいた

二人は小さな頃からいつも一緒にいた

互いに相手を思いやり、誰もが羨むような、そんな二人だった

だが、それも束の間のこと

やがてそのすべてが壊されてしまったのだった――――

不意に誰かに呼ばれたような気がして、燕は立ち止まった。

「ん？どうかした？」

急に立ち止まった燕を、紫苑は不思議そうに顔を覗き込んだ。

「ううん、なんでもない。なんか、誰かに呼ばれたような気がして

……。」

振り返り、あたりを見回してみるが、誰もそんなしぐさをしているような人物はいなかった。

「気のせいでしょ。」

「だよね。」

大したことでもないだろうと、二人は他愛のない会話をしながら歩いていく。

遠くから見つめている男の視線に、その時二人は気がつくことなどなかった。

「ユイフェン……やっと見つけた…」

数日後、燕は一人で昼食をとっていた。

お昼時ということで、店内はやや混雑してきている。燕は4人がけのテーブルに座り、ぼんやりと外を眺めていたのだった。

「ここ、よろしいですか？」

一人の男が手にトレイを持ちながら微笑んで立っている。

「え？……ああ、どうぞ。」

つられて笑顔になりながら、燕はテーブルの上の場所を空ける。男は「すみません」といいながら席に着いた。

「ここはいつもこんな感じなんですか？」

「え？」

「いつも、こんな風に混むんですかね？ 今日、初めて来たので……」

「ああ……ええ、まあ……」

男の唐突な質問に戸惑いながらも答える燕。納得したように頷くと、男はパスタを食べ始めた。

「僕のこと、覚えてません？」

そろそろ店をどうかと立ち上がった燕に、男は再び声をかけた。

「いえ……あの、どこかでお会いしましたっけ？」

首を傾げ、燕は記憶を辿るが、全く覚えがなかった。

「そう……やっぱ覚えてないんだ……」

男の顔に影が差したかと思えば、今度は薄く笑ったように見えた。

「……？」

「いえ、突然すみません。でも、僕はあなたの事をずっと前から知っているんですよ。」

警戒心を失わせるような表情で、男は再び微笑みかけた。

何がなんだかわからない燕は、ただただ啞然とするだけだった。

「あの……」

「それじゃあ、またどこかでお会いした時は、その時はもっとゆっくりお話できることを期待してますからね。」

一方的な男は、未だ動けない燕をよそにさつさと店を出て行った。

「なんなの？あの人？」

あれだけ印象に残るような人物を忘れるわけがない。しかし、以前に会った記憶など燕にはない。

だが、不思議と初めて会ったような感覚が燕にはなかった。男の聲がどこか聞き覚えのあるような、そんな声だったからだ。

第2話

カーテンの隙間から差し込む光は、外の天気が晴れであることを教えてくれていた。

けれども燕の気分は到底晴れとはいいがたいものだった。

「はぁ……」

「10回目。」

「……何が？」

「あんたが今日ため息ついた回数。なんなのよ？ いい加減うざくなってくるんですけど？」

「う……ごめん。でも……」

「でも？ なに？ また例の不審人物がらみ？」

「がらみっていうか……不審者とも言い切れないし……」

燕のことを知っているといった男と出会ってから1週間が過ぎようとしていた。

数日の間、妙にそれが気になっていた燕は連日詩音との会話にその話題を持っていった。

「夢を……ね、見るんだよね。毎日同じのを……」

ようやく頭から男のことが薄れ掛けてきた頃、それは始まった。

「夢ねえ。で？ その男が出てくるの？」

「出てくる。出てくるんだけど、その人だけじゃないの。」

「んー取りあえず夢の話してくれる？」

「うん。気がついたら草原みたいなどころにいて、私ともう一人、あの男の人じゃない人がそこにいるの。」

うる覚えなのか、ぽつり、ぽつりと語りだす燕。

「で、突然その男の人がどっかに行っちゃうの。それがなぜだかよくわからないんだけどすごく悲しくなるの。多分泣いてるんだよね、

目が覚めたとき涙流してるからさ。…んで、泣いているところに例のあの人が目の前に現れるの。逆光みたいになっててよく表情は見えないんだけど、笑ってる感じで立ってるの。」

「ふーん。で？」

「で、終わり。そこでいつも目が覚めるの。」

「……何に悩んでるのかがよくわからないんですけど。」

「私もよくわかんない。ただ、内容がよくわからない夢だから。」

「夢なんだからいいんじゃないの？それで。」

「いいのかなあ？」

夢だけにしておくことができないような、そんな感じがしてならぬ燕。詩音の言っていることは確かにそうだとはわかってはいても、なかなか納得するまでにはもう少し時間がかかるようだった。

通りに面したガラスを軽くたたく音がして、燕と詩音が顔をあげる
と例の男が嬉しそうに立っていた。

「もしかして、もしかしなくても例の人？」

「うん、例の人。」

二人が確認し合っているうちに、男は店内へと入ってきた。

「いやあ、お久しぶりです。あれから何度かここに来てたんですが、燕さんいつも時間がまちまちだったから。」

まるで、毎日燕がここに昼食を取りに来ていることを知っているかのような口振りだった。

「毎日来てたんですか？燕に会うために？」

「ええ、それがなにか？」

「なにかといわれましても……ねえ」

あまりにも正々堂々と言われてしまい、困った詩音は燕に視線を移した。燕も困ったような表情をしている。

「取り合えず、座ってもよろしいですか？」

断るに断りきれず承諾する二人。男は嬉しそうに席に着いた。

「そうだ、まだ僕の名前言ってなかったですよ。広樫ナノと申します。」

男、広樫ナノは二人に名刺を差し出しながら言った。

渡された名刺を詩音はまじまじと見つめながら問う。

「……ナノ？珍しいお名前ですね。」

「ナノテクノロジーとかの”ナノ”なんです。父親がそういう関係の仕事をしていたもので、ほとんど思い付きだそうですけど。」
毎度のことなのか、慣れたように説明をする広樫。

「……燕さん？」

広樫の名刺をずっと見つめたまま動かない燕を心配してか、広樫が声をかけた。

「えっ、あ、はい、なんででしょうか？」

「いえ、なんだかぼーっとされていたので。」

「そうでした？ごめんなさい。でも、お名前見てもやっぱり思い出せなくて……」

「ああ、もうどうでもいいんですよ、そんなこと。」

「どうでもいい？そんなこと？」

「ええ、覚えているか、いないかなんてもはや関係のないことです。今こうして僕たちがお互いを知り合いと認識していることが大事なんですから、ね。」

燕には、納得のいくようで行かない、そんな説明をされたようだった。うまくはぐらかされたとも言えるだろうか。

二度目の再開でも、広樫が燕にとってどのような人物であったかを、燕は思い出すことができなかった。

思い出せなかったのか、それとも思い出すことを無意識に拒んでいるのか。とにかく、なぜ広樫のことを自分は知らないのかが燕には気になって仕方がなかった。

やがてそれは、広樫についてもっと知りたいと思う好奇心に近いも

のとなっていた。

第3話

あれから何度も燕は広樫と昼食を共にするようになり、いつの間にかそれが日常の中での当たり前のこととなるのにはそう時間はかからなかった。

詩音が一緒のときもあったが、燕と詩音はもともと勤務場所が異なるために、大半は広樫と二人だった。

初めの頃とは随分と互いの雰囲気も変わって、古くからの友人のようだった。

「……え？」

その広樫の言葉があまりにも唐突だったのか、思わず燕は聞き返した。

「え？」じゃなくてさ、僕と付き合って欲しい……って、二度も言わせないでくれる？」

口調とは裏腹に広樫は真剣な表情をしていた。

「私が？」

「他に誰がいる？それとも僕のこと馬鹿にしてる？」

「そうじゃないけど……。」

「けど、なに？そういうこと言ってくるとは思ってなかった？一応初めからそのつもりでいたんだけどなあ？」

そういわれてしまうと、そんなような行動だったかもしれないと、今更ながらに思う燕。

「ごめん。」

「いや、そこを謝られても困るんだけど。返事は？どっち？」

断るだけの大した理由も見つけられなかったので、燕は答えにO.Kをだした。

「そもそもあの言い方、なーんか気に入らなかつたんだけどな。」

「だったらなんであんたはO・Kを出すのよ。」

「だって、断るだけの理由なんてなかったし。」

「それだけ？」

「んー、それだけじゃないような気もするけどさ、ま、いいじゃん。」

「適当ー。可愛いそーな広樫さん。」

「か、可愛いそうって!!」

家に帰ってから、早速昼間のことを詩音に報告する燕。報告するところが義務のように、広樫との出来事はほとんどを詩音に伝えていた。「まあ、恋愛をするような気合が微塵も感じられなかった燕にしては進歩したんじゃない？」

「またそうやって人をサルみたいにな……。」

「あれれー？サルだなんて一言も言っていないよ？」

黙り込む燕。電話の向こうでは詩音が笑い転げているのが聞こえてきた。

「そんなに笑うことないのにー。」

「ごめんごめん。とにかくおめでとう。おめでとう？って言うの？ま、いっか、お幸せにね。」

なんとなく腑に落ちないままだったが、時間が遅いせいもあって、会話はそこで終了した。

広樫はベットに仰向けになり、ぼんやりと天井を見つめていた。

「やっとなんて君を手に入れることができたよ……ユイフェン……」

ほくそ笑み、広樫は呟いた。そうして、今度は腹の底から笑う。

「もう誰にも邪魔はさせない……」

再び笑う広樫。それは狂気に満ちた笑いだった。

第4話

2人が付き合い始めてから数ヶ月、互いの生活になんら変化はない。唯一変わったことといえば、時々一緒に昼食をしていた詩音が2人に遠慮をしてくれたくらいで、いつも通り昼食を共にするのが精一杯のデートのようなものだった。

「つまらなくない？いつもこんなで。」

「ん？なにが？」

「欲がないというか、単純に興味がないのか……」
そっけない燕に広樫はあきれる。

「……どっか行きたいとか？」

「なんかそれって僕の台詞だよねえ？」

「そう？」

ならばと燕は考え込むが、そう咄嗟に思いつくようなものでもない。

「駄目だね。簡単に気の聞いた言葉なんて言えないよ？」

「別に気の利いた言葉を求めてたわけじゃな……」

言いかけた広樫の視線は通りに向けられていた。

「あいつ……。」

「誰？」

振り返って広樫の視線の先を探す。

「……吉村君？」

「知り合いなのか!？」

それがまるでいけないことのように声を荒げる広樫。

「知り合いというか、同期で同じ課の人だけど、それがなにか問題でもあるの？」

「問題はないといえはないけど、あるといえはある。」

「意味がわからない。」

「よく話したりする？」

「そりゃあ仕事をしてるんだから。」

「仕事以外では？」

「……なんなの、一体？」

燕はまるで尋問されているような気分だった。広瀬はそうやって時々平静さを失う。

ただの同僚の存在は、広瀬にとってそんなにも重要なことなのだろうか。燕は何も言わず、表情だけでその意を伝えてみる。

それに気がついたのか、広瀬は一度通りに視線を向けた。もちろん、吉村はもうそこにはいない。

「ごめん。つい。」

「ついて……」

会話はそこで中断した。何があったわけではない、それ以上続かなかったのだ。

「あーもう、息が詰まるー。」

「それを聞くこっちの身にもなってよね。」

「冷たい事言わないでよ詩音。」

「私は人生相談の先生じゃないの。」

「薄情者。」

「あんたねえ……。」

何かあれば詩音に電話して報告をする燕だが、喜びを報告するのは稀であった。

「たまには嬉しい報告ぐらい聞かせてよね、聞いててもつまらないじゃない。」

「別に、詩音を喜ばせるために私は生きてるわけじゃないし。」

「そりゃそうだけだね。それにしてもちよつと愚痴が多くない？ 本当は後悔してるんじゃないの？」

「う……」

凶星だった。

不満があるわけではない。広樫は燕自身、自分にはもったいないくらしいの人物だと思っている。だが、なにかが引っかかっているのだ。その何かが、燕を不安にさせているのは確かだった。

「夢のこと、まだ気にしてる？」

「ん……、だって未だに見るんだもん。」

「なにか夢の中で変わったこととかないの？」

「うーん。あ、そういえば広樫さん吉村君のこと知ってるみたいだったよ。」

「話題変えてどうすんのよ……」

「思い出しちゃったんだから、仕方がない。」

「吉村君ねえ……そういえば、彼も広樫さんと似たようなこと言ってたっけ。」

「え？」

「前にね、ほら、移動前同じ課だったでしょ？その時に聞いたんだけど、『ずっと昔に会ったような気がする。すごく懐かしいけど、なんだか思い出したいくないような……』って言ってた。」

「って言ってたって……、「そういえば」の限度を超えてるよね。」

「私にとってはどうでもいいことだったんだから仕方がないでしょ。」

「思い出したくないってことは、相当嫌な思い出なのかなあ？」

「さあ……。直接本人に聞いてみれば？」

「聞いてどうすればいいの？」

「それくらい自分で考えてください。はい、じゃあ、おやすみ！」
一方的に切られた電話を見つめながら燕は考え込んだ。

夢の中に出てきた二人の男と、燕のことを以前から知っていると二人の男。夢の中の1人は広樫であることに間違いはないと燕は無意識のうちに確信していた。では、もう1人は吉村なのではないだろうか。それを確信させるような根拠はどこにもなかったが、なぜだか燕はそうとしか考えられなかった。

「私はあの2人とどういう関係だったんだろう……。」

その夜、燕はなかなか寝付くことができなかった。

第5話

男は微笑んでいた。微笑みながら、しきりに「こっちへおいで」と手招きをしている。

燕は手を招いている男の方へと歩き出した。そして、男の下へとたどり着いたその時、さっきまで微笑んでいた男の顔が苦痛に歪み、その場に崩れ落ちた。

いつの間にか別の男が、燕の傍で微笑んでいた――

まただ、と燕は頬を伝う涙を無言で拭った。

「嫌な夢……」

おまけに寝汗まで掻いてしまっている。あの夢を見るときは決まって目覚めは最悪である。

まして、その内容がだんだんと鮮明になってきているような気がしてならなかった。

そして、断片的だが、夢で見たものとは違うことを時折ふっと燕は思い出すようになっていたのだ。

この夢の話を、燕は何度か広樫に話そうとはしていたものの、なかなか話せないでいた。なんとなく、それを話すのが憚られるような気がしてならなかったのだ。

「ふーん、それで最後に燕の横に立ってるのが僕ってわけだ？」
おどけた様に広樫は言ってみせた。

「うん……でね、その倒れた人は吉村君だったような気がするの。」
「……夢の話だろ。」

燕が夢のことを広樫に話すことに憚られていたのは、その夢に出てきていたもう一人の人物が吉村にそっくりだったからだ。現に、吉

村の名前が出てきただけだというのに、広樫は急に不機嫌になっている。

「夢……だけどさ、何回も同じような夢みてるんだよ？ 一時期は毎日だったし。」

「だからなんだっていうんだ？」

「私のこと前から知ってるって言ってたから、何か知ってるんじゃないかと思って……吉村君も私のこと前から知ってるような気がするって言ってたみたいだし。」

燕の話を知っているのかいないのか、広樫は不機嫌そうな表情のまま外を眺めている。

「ねえ、なんでそんなに吉村君のこと嫌うの？」

「別に嫌ってるわけじゃない。」

「その態度が嫌ってるっていうの。ねえ、なんで？ 吉村君いい人だよ？」

「あんな人間のどこがいいんだよ……」

「え……？」

それは、どこかで聞き覚えのある言葉だった。以前にも同じことを広樫に言われたことがあると、燕は記憶を辿る。

”どこで言われたんだろう……最近じゃない、もっとずっと昔に……昔に？”

燕が全てを思い出すのに、さほど時間はかからなかった。

「どうした？」

急に考え込んだ燕に、広樫は心配そうに声を掛ける。

「違う……」

「燕？」

全身が恐怖で震え始めてているのを燕は感じていた。何食わぬ顔をして、目の前に座っている広樫が怖くて仕方がない。

”——あの人を”

「あなたじゃない……」

「何言ってるんだ、どうしたんだよ？」

広瀬は困ったような顔をしていた。だが、ここまできて広瀬を信用することは燕にはもうできないことだった。

「私はあなたを選んだんじゃない!!」

”——私から奪った人”

「燕!!」

その場にるのが耐えられなくなったのか、燕は店を飛び出していった。その表情は、数分前からは想像もできないほどに恐怖に満ちたものだった。

「全てを思い出した……か。」

軽く舌打ちをすると、広瀬もまた、燕を追いかけて店を後にした。

第6話

燕は行く当てもなくただ走っていた。

全てを思い出したことで、頭がパニックを起こしている。どうしていいのかわからなかったのだ。

「向居？」

不意に名前を呼ばれて、燕は立ち止まる。声のする方に顔を向けると、そこには吉村がいた。

「やっぱり向居だ。こんなところでジョギングでも……泣いてる、よね？」

言われて初めて、燕は自分が泣いていることに気がつく。

「あれ？やだ、なんでだろう？」

無理やりに吉村に笑ってみせる燕。

「何かあった？」

燕は笑うの止めた。

「前に吉村君、詩音に言ったよね？私のことずっと前から知っているような気がするって。」

「え、ああ、確かに言ったけど……」

「それ、気がするとかそういうのじゃないよ。」

「どういう意味？」

「事実なんだよ。」

「事実？」

「吉村君はきっと全部を覚えていないだけで、忘れてるだけ。私たちはずっと昔に知り合ってる。今の姿で生まれるずっと前に。」

「それって前世がどうのこうのっていう……？」

話の展開に吉村は混乱していた。燕自身も、今ここで全てを理解してもらおうなどとは思ってもいなかった。

「とにかく、今は私の傍にいない方がいい。早く逃げて！」

「ちょ、待ってよ、逃げるって？なにから？」

「お願いだから早く！もうあなたが死ぬところなんて見たくないの！」

「死ぬって……」

燕の目から再び涙が零れ落ちる。そうして、しきりに「逃げて」と吉村に呟いていた。

「向居、ちょっと落ち着けよ。なにいつてるかわかんないよ？どうしたんだよ？」

泣きじゃくる燕に吉村は必死に問いかけるが、燕はただ同じ言葉を繰り返すだけだった。

「無駄だよ、パニックを起こしてる。君のせいだね。」

吉村が振り返ると、そこには広樫が立っていた。燕を追ってきた割には息一つ切らさず、広樫の周りだけなにか別の空間のようでもあった。

「あんた誰だよ？それに、俺のせいってなんだよ？」

「燕のことは覚えていても、僕の場合は覚えてない、か。まあ、それは正しい判断かもしれないね。」

「一体なんのことだ？」

近づいてくる広樫から、無意識に吉村は後ずさりをしていた。

「体は覚えているみたいだけどね。君は知らなくてもいいことだよ。」

「吉村君、逃げて。」

不意に、背中越しに聞こえてきた燕の声は、吉村に何かを思い出させた。

「……いや、逃げるわけにはいかないよ。俺は、君を守ると約束したんだから。」

「吉村君？」

吉村の顔に戸惑いはなく、真っ直ぐに広樫を見据えていた。

「まいったな、燕も君も、どうしてそうポンポンと都合よく思い出してくれるかな……」

困っている様子など微塵もみせずに広樫は呟く。そうして広樫はゆ

つくりと右手を吉村に向かって上げた。

「何をするつもりだ？」

「わかってるだろう？ 君が邪魔なんだ。燕は僕のもの。君には消えてもらう。」

――一瞬の出来事だった。

広樫の右手が光ったと思ったその瞬間に、吉村はその場に崩れ落ちた。

「……くっ……あんた、それでも天使だったのかよ……燕とは大違い……だな」

「へえ、強くなったもんだね。前は話すことすらないまま終わったっていうのに。」

倒れた吉村を見下ろしながら、口元に笑みを浮かべて広樫は続ける、
「天使だった？……そうだね、もうこの背中に白い翼はない。でも、黒い羽はある。」

不敵な笑みをした広樫の背中にはいつの間にか黒々とした羽があった。

「そんな……どうして……」

漆黒の羽に、燕はますます恐怖を感じていた。

「ミリのためだよ？ ミリが人間になるなんていうから、僕も人間になった。人間を好きになったりするから、僕が消してやったんだよ。そうしたら羽が生えていたんだ、黒い羽がね。全部、ミリのためなんだよ？」

「私のため？ 私のためにシェンホンも殺したっていうの？」

「そうさ、ミリを誘惑した悪いやつだからね。さあ、こっちへおいで。ミリ、僕と行こう。」

先ほどまでの異様な気配を隠してか、背中の中は消え、微笑みなが

ら広櫓は燕に手を差し伸べる。

「やめて：私はもうミリじゃない。その名前は人間になるときに捨てたの！」

意識が遠のきそうな吉村をしっかりと抱いて、燕は必死にその場から離れようとした。しかし、大人の男一人を運ぶのに燕には少し力が足りなかった。

「また僕から逃げるの？」

「逃げるわ。私はあなたを愛することはできないから。」

「どうしてもその男を選んだね。……なら仕方がない、また全てを忘れてもらうまでだよ。」

にっこりと笑うと、広櫓は差し伸べていた手を、吉村に向けたときと同じように燕に向けた。

「また同じことを繰り返すの？」

「そうだね、もう一度やり直してみるよ。」

「何度やっても結果は同じよ。」

「大丈夫、今度は思い出させたりなんかしないから。」

——再び広櫓の右手が眩しく光を放った。

第7話

「……なんでだよ…」

「これ以上、お前を闇の中へ行かせるわけには行かねえんだよ。」

事態は思わぬ方向へと進んでいた。

自分の命もここまでと、燕が覚悟を決めたその瞬間、広樫の前に一人の男が立ちはだかった。

まるで、燕と吉村を守るかのように男は二人の前に立ち、広樫の放った光は男を直撃した。

「フェムト……。」

かつての友人の名を燕は懐かしみを帯びた声で呼んだ。

「悪かったな、ミリ。俺がちゃんとこいつのこと見てたら、こんなことにならなかったのにな。でも、もうこれ以上はさせねえから。」

男は少しだけ燕に微笑むと、広樫に向かってその歩を急速に早めた。

「ナノ、お前がいる場所はここじゃない。お前ならちゃんと元に戻るから。俺が元に戻してやるから……。」

「やめろ！来るな！死にぞこないに何ができるって言うんだ！！」

抵抗する広樫を軽々と抱えると、男はその白い翼で天空へと高らかに飛び去っていった。

「なーに、なんだってできるさ。」

「あれ、誰なのさ？」

救急車で病院へと搬送される途中、吉村は燕に問いかける。

「友達。私とナノとあの人…フェムトって言うんだけどね、幼馴染みだったの。」

「そっか…戻すとか何とか言ってたけど…」

「うん。」

「戻れるといいな、幼馴染みだったころみたいに。」

「うん。」

燕の瞳から、一筋の涙が頬を伝った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3850a/>

reunite

2010年10月10日04時21分発行